第３９回区民車座集会意見交換内容（幸区）

１　開催日時　平成３０年１１月１２日（月）　午後３時００分から午後５時００分まで
２　場　　所　コトニアガーデン新川崎弥生テラス地域交流室
３　参加者等　参加者２５名、傍聴者１２名　　合計３７名

＜開会＞
司会：皆様、こんにちは。定刻になりましたので、ただいまから第３９回区民車座集会を始めさせていただきます。
　私は、本日の司会を務めます、幸区役所地域みまもり支援センターの野村と申します。どうぞよろしくお願いいたします。
　本日の車座集会は、「どの子も置き去りにしない地域づくり～ふれあいあふれる幸区をめざして～」をテーマに、地域で活動する団体等の皆様と、市長との意見交換を行っていただきます。
　本日御参加いただいている皆様を御紹介いたします。
　まず、総合科学高校から佐藤優衣さんです。

（拍手）

司会：また、地域で活動されている団体といたしまして、つばき学習会さん。

（拍手）

司会：ＮＰＯ法人はたらくらすさん。

（拍手）

司会：幸国際子育てクラブトントンさん。

（拍手）

司会：東小倉小学校寺子屋さん。

（拍手）

司会：ＮＰＯ法人幸区盛り上げ隊さん。

（拍手）

司会：幸区子ども会連合会さん。

（拍手）

司会：地域教育会議さん。

（拍手）

司会：住民活動拠点陽だまりさん。

（拍手）

司会：ひよし食堂の会さん。

（拍手）

司会：夢見ヶ崎プレーパークをつくる会さん。

（拍手）

司会：以上の皆様に御参加いただいております。
　さらに、コトニアガーデン新川崎の開発事業社である東日本旅客鉄道株式会社横浜支社及び株式会社ジェイアール東日本都市開発神奈川支社、さらに本日の会場でありますＮＲＥ新川崎弥生テラスの運営会社である株式会社日本レストランエンタプライズ及び株式会社エヌアールイーサービスの皆様にもお越しいただいております。どうぞよろしくお願いいたします。

（拍手）

司会：なお、地域で活動されている皆様が取り組まれている活動のチラシなどを封筒にまとめさせていただいております。後ほど御参照いただければと思います。
　それでは、行政からの出席者を紹介いたします。福田紀彦川崎市長でございます。

市長：どうぞよろしくお願いします。

（拍手）

司会：石渡伸幸幸区長でございます。

区長：どうぞよろしくお願いします。

（拍手）

司会：それでは、初めに福田市長から一言御挨拶を申し上げます。

＜市長挨拶＞
市長：皆様、改めましてこんにちは。今日は第３９回目になります区民車座集会にお集まりをいただきまし

て、本当にありがとうございます。
　もう各区７巡目※ぐらいになっています。幸区でも７回目※ぐらいになっておりますけども、今日は先ほど御紹介いただいたとおり、この「どの子も置き去りにしない地域づくり」ということで、いろんな形で地域づくり、あるいは居場所づくりなんかに関わっていただいている方に今日はお集まりをいただいて、そして、この会場もそうですけども、まちづくり全体に取り組んでいるというか、開発事業者の方だとか、ここに施設を置いていただいて、地域交流室を開放していただいている。こういう人たちの協力があって、今日はできております。本当に改めて感謝をしたいと思っています。
　挨拶はそこそこにして、具体的なお話をこれから議論、ディスカッションしていきたいなというふうに思っておりますので、今日も有意義な区民車座集会になるように、皆さん御協力のほど、よろしくお願いします。
　（※正しくは、６巡目です。）

（拍手）

司会：ありがとうございます。
　次に、区役所より、幸区の現状と課題について、御説明いたします。

＜区の現状・課題説明＞
企画課：皆様、こんにちは。幸区役所企画課の二瓶と申します。どうぞよろしくお願いいたします。
　それでは、本日のテーマを踏まえまして、幸区の現状と課題につきまして、皆様と情報を共有するために、スライドを御用意させていただきました。
　ちょっと後ろの方、見えづらい場合は、スライドの写しをカラーでお配りさせていただいております。そちらお手元を御確認いただきながら、聞いていただければと思います。
　スライドでございます。まず、幸区の現状といたしまして、１８歳未満の人口増加率が最も高い、こういったものをお示しさせていただいております。こちらは、区ごとの１８歳未満の人口推移を示したものです。
　この中で幸区というのは、行政区７区において一番最も規模が小さく、また人口も少ないというところではございますけども、１８歳未満の人口増加率、こちらを見ますと、７区の中で最も高い、こういった数値を示しております。
　次のスライドに移りまして、ここからは子どもに関するデータを幾つか御紹介させていただこうかと思っております。こちらのスライドでございますけれども、こちらは市内の公立小・中学校のデータになるんですが、こちらの中で外国人の児童生徒数の推移、こちらをお示ししたものでございます。
　人数では、特にやはり川崎区のほうが突出したデータにはなってございますけれども、外国人児童生徒数の増加率というものを見ますと、実は７区の中では幸区が最も高いという数値になってございます。
　こちらは小・中学校の合計ということでございますが、実はまだまだ未就学、小学校に上がる前の外国人のお子さんも非常にたくさん多くいらっしゃいます。特に幸区は国籍も多岐にわたっておりまして、１位が中国、韓国、フィリピン、ベトナム、ネパール、インドと、本当に２０カ国以上の国籍を有する子どもたちが川崎市、この幸区の中にいらっしゃいます。
　続きまして、こちらは市立小・中学校に在籍する特別支援学級、こちらのお子さんの数をお示しさせていただいております。特別支援学級の児童生徒数なんですが、スライドを見てわかるように、全市的に増加している状況にございます。
　幸区なんですが、最も高い増加率というところでは、高津区でございますけども、幸区も２番目に高い増加率を示しているという状況でございます。こうした中、特別支援学級の児童・生徒さん、障害種別でいいますと、最も多いという数値が出ているのが自閉症であるとか情緒障害、次に知的障害なんかを有するお子

さんが、この特別支援学級に在籍している。

一つ、この増加している理由というところなんですけれども、これはちょっと文部科学省のデータでございますけれども、学校側、現在の理解が広まって、把握が進んだ結果というふうには聞いております。

次のスライドです。こちらは、川崎市立小・中学校における長期欠席の状況の中から、病気等を除きまして、学年別の不登校の児童生徒数の推移をお示ししたものでございます。これは幸区というデータはございませんが、全市的なデータになっております。

見てお分かりのように、小・中学校ともにやはり年々増加傾向にあるという状況にございます。また、特に学年が上がるにつれて増加していると、そういった状況がございます。

また、不登校の子の要因というところでございますけども、ここでは小学校、中学校ともに「不安」の傾向がある。また、「無気力」の傾向がある、こういったデータが示されております。

次のこちらのスライドですが、こちらは要保護児童対策地域協議会という協議会における取扱件数です。まず、この協議会というものなんですけども、こちらは児童福祉法に規定される地域のネットワーク推進のための協議会というもので、具体的に言いますと、虐待を受けた児童や非行児童の要保護といった児童、また要保護児童より広い範囲で何らかの支援が必要、そういった要支援児童等の早期発見や適切な保護について、関係機関が情報や考え方を共有して、連携を図るための協議会となっております。

ここでいう児童といいますと、小学校ということになるんですが、ここでの児童福祉法においては、満１８歳に満たない者と規定されております。

こちらの協議会において取り扱われた件数を見ますと、川崎区が最も高くなっておりますけども、区民に占める割合ということで割り返したときには、実は幸区が最も高いという率になっております。そうして、こちらの今後、人口が増える中では、非常に地域協議会の件数の今後の懸念というのもあるものでございます。

次に、子どもに関するデータで、こちらが市内の保護者の方６，０００人を対象に、保護者が子どもと接する時間についてアンケートを行ったものです。約６，０００人の対象の中で、２，４００人の有効回答がございまして、その結果をこちらのグラフにまとめたものでございます。

ちなみに、この平日と休日それぞれ回答をいただいているんですが、まず、平日のほうを見ますと、親と子どもが接する時間というところで、回答をいただいた２，４００人の中で、１時間未満、平日１時間未満と回答した割合が２３．４％となっております。

こちらが休日ですね。休日、親御さんとお子さんがどれくらい接していますか、２時間未満との回答が１３．９％、こういった数字になっております。

平日でいえば、先ほど１時間未満と回答した親御さんが４．３人に一人、そういった割合になっています。休日でいえば、７．２人に一人が、この２時間未満。個人的な印象ですが、本当に少ないのかなと、そんな印象を受けたところです。

子どもに関するデータで、先ほど要保護児童対策地域協議会における取扱件数というものを説明させていただきました。ただ、一方で、なかなかそういった数値に表れない子どもも、潜在的に課題を抱える子どもというのも多くいるのではないかというふうに考えているところです。そうした潜在的に課題を抱える子どもは、どの時点から課題を抱えるようになったか。また、何かしらサインがあったのではないか、そんなことを考えまして、こちらの区内の小学校に聞き取りを行いました。

子どもの変化が、サインが最も感じられることは何ですか、そのように問い合わせをしたところ、区内のこれは校長先生からの回答ですが、やはり生活リズムの乱れが生じてくるというお答えをいただきました。朝、登校時間が徐々に遅くなるとか、そういった生活の乱れが生じてくる。また、孤立しがちである、そんなお話をちょっと伺ってきました。

また、一つ事例としてお伺いできたのが、小学校の児童が夜に出歩いている姿を、出歩くようになったと、

そういった姿を地域の方が見つけてくれて、学校に連絡をいただいたことがあったと。非常になかなか放課後、休日、子どもの生活実態というのは、なかなか学校でも目が届きにくいという状態。そこで、地域の方から連絡をいただいたんだと。非常に助かるんだと、そんな話を伺ってきたところです。

こちらのスライドですが、子どもの生活実態等といたしまして、要保護ケース、要支援、こういった支援を必要とする子どもに対しましては、行政による様々な支援施策が講じられているものの、サインをみずから発信できない場合など、子どもの生活実態はなかなか行政だけでは把握しづらいのではないか、そのように考えております。

そうした中、今日お集まりいただいている皆様も含めまして、地域がより身近な存在の一つではないかというふうに考えてございます。

家庭や学校での生活時間を除きまして、本車座のテーマであります、どの子も置き去りにしないために、子どもにとって地域がより身近な存在であって、重要な存在であるというふうに考えてございます。

最後のスライドになりますけども、どの子も置き去りにしない地域づくりといたしまして、行政とともに地域の力で子どもを取り巻く状況を、赤信号を灯さないような支え合いを構築していきたいというふうに考えてございます。

幸区からの説明は以上でございます。

司会：それでは、トップバッターといたしまして、市立総合科学高校定時制課程３年生の佐藤優衣さんから、お話を伺いたいと思います。

それでは、佐藤さん、よろしくお願いいたします。

（拍手）

＜体験談等発表＞

佐藤さん：私の周りには、不登校になった人が何人もいました。例えば、ほかのクラスには友達がいたが、自分のクラスの人たちとうまくなじめず、どうしてもクラスで孤立してしまう子。先生と折り合いが合わず、しまいには先生としてその発言はおかしいと思ってしまうようなことを担任に言われてしまった子。先生や親からも理解されず、ふさぎ込んでしまった子。大人にも言えることですが、周りに誰からも理解してもらえないということは、一番辛いことだと思います。こういった人たちが最後に口にする言葉はただ一つ、死にたいです。

実のところ、私も不登校でした。先生が個別で勉強を教えてくださいました。中間、期末テストは別室で受けさせてもらい、提出物、いわゆる宿題ですね、それも提出していました。だからか、学校に行かなくてもいいんじゃないかという気持ちが芽生えてしまったのです。もしかしたら、環境が整っていたことが不登校の原因だったかもしれませんし、同年代の女子との付き合いに疲れてしまったといいますか、嫌気が差してしまったのだろうと思います。

忘れ物を届けたら、中を勝手に見たと難癖つけてきたり、ただ、自分の努力が足りないだけなのに、試合に出られないのはおまえのせいだと言ってきたり、こんな人たちがうじゃうじゃいたために、いくらいい人はいるよ、悪い人ばかりじゃないよと言われたとしても、理解ができなかったのです。おかげでトラウマと言えるのかわかりませんが、今でも同じ年代の女性で二つ結びの人を見ると、吐き気がします。似たような性格の人と接すると、冷や汗が止まりません。

理由を考えるといろいろ出てきますが、やはり大部分、行き着くのは何となくかもしれません。私はただ、学校に何となく行きたくなかったということ。その何となくには、人によりさまざまな理由が入ることも理解しています。

甘えた話ではありますが、私はこれを仕方がないことだと思っています。きっと気合いが足りない、根気

がないからだとか、親の教育が悪いからとかと言ってくる人もいますが、私はそれを無視します。そうです、私は仕方がない、つまり間が悪かったと考えています。少なくとも私が登校できなかったのは、親のせいでも、先生たち、学校のせいでもない。ましてや、他の助けてくれなかった人たちのせいでもない。間が悪かった、今、こう思えているのも、どこかの誰かのおかげかもしれません。それを考えると、余りきれいな言葉ではありませんが、自分は恵まれていた。しかし、私のように能天気な考えに至る人は多分余りいないと思います。

小学生のころ、友人に不登校気味な子がいました。こういったことを他人が口に出すのはいけないと思うのですが、その子の家庭は子どものころの私から見てもいいとは言えず、いつも口癖のように家帰りたくねえと言っていました。そんな彼が頼りにしていたのが、学校でも、ましてや親でもなく、ふれあい館やこども文化センター、私たちは「こ文」と呼んでいます、そういった、いつでも誰でもいていい場所というところでした。

あと、私は行ったことがなかったのですが、学校の近くに寺子屋というものがあり、そこで、その三つのところで勉強を教えてもらったりしていたようです。同じような境遇で、同じぐらいの年齢の友達ができたと、うれしそうだったのを今でも覚えています。これもまた言い方が悪いですが、自分と全く関係のない赤の他人だったり、自分の他にもこういう人が存在するというところが気兼ねないといいますか、下手に身構えなくてもいいんだという気持ちになるのかもしれません。

そして、これは私個人の見解ですが、不登校になった人は、ぶっちゃけ被害妄想の塊です。そのため、同じ学校の子、同じクラスの子と出会ってしまうことを苦痛とします。１日でも登校したほうがいいことは本人もわかっているのですが、それを大して仲がいいとも言えないクラスの他人や、話したこともない先生から学校に来たほうがいいと言われるのも苦痛とします。かといって、１日でも登校すると、周りが話しかけてくる、ひそひそと自分の話をしている。これも立派な不登校の理由だと思います。自分のために多くの人が動いてしまったという罪悪感と、隠れていた羞恥心があふれ出してしまうのです。思いやりのある先生、生徒が、加害者のように感じてしまうのです。話せないけれど理解してくれない親なんて、本人も辛い、でも周りもそわそわしてしまうのが不登校です。あくまで一例ですが。

となると必然的に必要とされるのが慣れです。本人が他人に慣れること。クラスの人がその人に慣れること。周りが慣れること。他人に慣れるということが一番大切だと思います。でも、一歩踏み出せない。広告とか学校で配られた手紙には、私のように悩んでいる人に向けたところがあるみたい。でも、ここで終わってしまうのです。じゃあ、ちょっと行ってみようとならない。助けてほしいと思っても、誰かに話そうと思わない。

皆さんは私のことを自分勝手だと思いますか。

御清聴ありがとうございました。

（拍手）

司会：思いのこもったお話をしていただき、本当にありがとうございました。

＜取組紹介＞

司会：続きまして、それでは地域で活動されている皆様のうち、幾つかの団体の皆様から取り組み事例を発表していただきたいと思います。

初めに、つばき学習会の五十嵐様、お願いいたします。

五十嵐（潤）さん：皆様、こんにちは。つばき学習会の事務局をしております五十嵐と申します。よろしく

お願いいたします。

まず、つばき学習会としての簡単な概要と、それから事例をその後に発表させていただければと思います。時間の関係上、初めのスライドのほうはちょっと割愛させていただきながら、お話をさせていただきます。

まず、つばき学習会の概要といたしましては、まず、生活困窮者の方々への中学生の学習支援を行っておりまして、その中で実際に支援をしてみると、小学校のころから苦手をたくさん積んできた、そういう方が本当に本当に多くいらっしゃったんですね。だから、そのためにいくら学習支援をしても追いつかない。そういう現状をたびたび多く見てきまして、その中でやっぱり小学生からやり直しをしなければと、そうした発想で小学生を相手に学習支援と居場所の提供をしようというような発想に至りました。

一応会の目的とコンセプトとしましては、先ほどのお話でも一部ありましたけれども、学校や家庭の中に子どもはいます。なので、一概に子どもを救おうとしても、その子どもを取り巻く環境も支援しなければ、結局は弱い立場の人がいじめられるといいますか、ちょっとよくない立場に追い込まれてしまうんですよね。なので、家庭や学校も支援したいという、そういう考えから事業計画とさせていただいております。

特に無償で居場所を提供して、最低限の学力を保障すると。これは生活保護家庭の方でも高校に行けるようにということで、一番初めの２年から無償で学力の保障をするというのを一つの理念と掲げております。

次の事業内容につきましては、ちょっと御一読いただければと思います。簡単になんですけれども、こうした、実際に家庭や学校での居場所がない子どもたちに、彼らがやってくれるのではない、彼らがやってくれるとして遠めに見ているのではなくて、自分たちやれる人がやろうと。まずはやれる人がやろうと。そうした発想から、大学生と一緒に、学べる環境ということで誰にでも開かれた場所ということで、幸区社協様に場所をお借りして活動しております。

実際、今のところ外国籍の方からも相談が来ております。それから、ひとり親家庭の子ども、事例を挙げますけれども、相談に来ております。発達障害の方も実際に事例で来ております。

事例１のこちらのＡさんのケースなんですけれども、こちらは療育センター様と連携をしまして、まだ発達障害は小学校で見守りをした中でも、リスクの検査というのがあったんですが、それが発達障害の検査をしなければ実際の支援につながらないパターンがほとんど多いんですね。そのために、まだ検査をする前の段階の方々、要ははざまの子どもと言われる方を対象に学習支援をさせていただいております。

そのうちの一つの例としては、個別に算数を教えることで、何とか学校についていけるようになったというのが一つの事例でございます。

こちらは発達障害ということで、余り多く言うと、そうした子どもたちだけ来ているのかというふうになってしまうんですけれども、実はそうではなくて、療育センターの方から各自紹介をいただいて、幸区社協さんには誰でも来れる居場所という名前をうった上で、実際は裏から紹介をいただいているというような形で、できるだけ差別の温床にならないような、そうした工夫をさせていただいております。

ただ、実際には本当に様々な子どもがいらっしゃって、発達障害がない子どもなんですけれども、Ｂさんのケースです。この方はフェイスブックを経由して、お母さんから相談がありました。やはりチラシで広報しても、ウエブ世代の方ですとか、何をどのメディアでヒットするのか、困ったときにどのメディアに頼るのかというのが、やはり世代によって全く違うので、そこはアプローチとしては、３０代から４０代の母親をターゲットではフェイスブックで今対応して、広報をさせていただいております。

実際に、ちょっとこのレジュメのほうには詳細は書かなかったんですけれども、言葉遣い等で気になるところということなんですが、実際に学習支援をしたりですとか、遊んだりとか、そうしたことをしている中で、母親と戦うということが出てくるんです。母親と戦う。それから、もちろん死を連想させるような言葉を連呼したりですとか、それから毎週毎週頭を洗ってきていない。冬にも関わらず、短パン、泥ズボンを平気で履いてくる。これは大丈夫なのかというような感じがかなりして、継続して一緒に見守りをした中で、黄色信号としては減っていったんですけれども、一番最後に会ったときには、実際に学校の中で問題を起こ

したというようなことを子どもから実際に聞きまして、ちょっと呼び出しをされて、実際、今日、代表の吉原が来ていないんですけれども、小学校の中で呼び出されるというのはかなりのレベルというようなことも聞きましたので、ちょっと今後どうやって支援したらいいのかなというのは、ちょっとつばき学習会としては限界といいますか、こういう以降の専門的支援をどうしたらいいのかというのが、見守った上で感じたところでございます。

すみません。最後の事例のＣさんのケースなんですけれども、こちらがちょっと明るい話にはなるんですけれども、私どもは先ほど申し上げましたとおりに、誰かがやるんではなくて、まずは自分たちでやろうと。そうした考えのもとで、大学生から今は６０歳の方も、還暦世代を過ぎた方も一緒に仲間になって、外国籍、障害、ひとり親家庭、どんな子どもでも来られる放課後の居場所をつくっております。

特に、先ほどの発表では休日になかなか接する機会がないということでしたので、休日を中心にちょっと事業を開いているんですけれども、その中でおばあさまからある相談が寄せられました。その相談というのが夏休み前にありまして、これから、ちょうど３兄弟いて、おばあさんが主に一人で育てられていて、これから夏休み、長い間御飯をつくるのが大変だと。御飯をつくるのが、毎日３食つくるのが大変なのよねという、そういう相談が寄せられまして、そのときに本当は何かやってあげたかったんですけれども、何か例えばそれを支援するツールや情報を私は全然存じ上げませんでしたし、そのための支援というのをうちで何かサービスを持っているわけではなかったので、相談を聞くのにとどまったんですけれども、何とか私たち学習支援の団体として、子どもに勉強を教える、子どもに勉強を教えるという文脈の中でいかに家事の負担を減らすのか。子どもに勉強を教えながら、いかに家事の負担を減らすのか。そうしたことを考えて、子どもと一家の食事を子どもと楽しく支度できるように、ちょっと発想の転換ですけど、そのような事業ができればということで、ちょっと考えておりました。

そこで、個別の課題として、おばあちゃんの言葉がきっかけだったんですけれども、個別の課題であったものを、さまざま地域の情報はちょっと私は全くわからなかったので、地域のどこにニーズがあるのかといったことはわからなかったんですけれども、ただマイナビですとか一般企業の統計等を調べまして、最も家事負担にされているのは食事の支度であるということがわかりましたので、恐らくこの食事の支度というのは、幸区の中でもどの地域かというのはちょっと地域アセスメントができないのでわからないんですけれども、どうやら地域の課題として支援に昇華させられるのではないかというような話になり、そこでＮＰＯ法人はたらくらすさんとちょっと一緒にお話をしました。

その中で出た、ちょっと今は企画をしている最中ではあるんですけれども、まずは地域を巻き込んで、小学生たちで調理実習を行うと。調理実習を行うことで、子どもに家事力をつけると。そして、１回、その日に来たときは、その子が一家分の夕飯の支度を全て終わらせて、お弁当を持って帰宅すると。そうすると、夕飯の支度は全て終わっているので、家事の負担を軽減させられるのではないかというふうに考えております。

今現在、そのような形で、さまざまな法人様と協力をさせていただきながら、子ども弁当を企画している途中でございます。

以上になります。ありがとうございました。

（拍手）

司会：ありがとうございました。

次に、今のお話にも出ましたＮＰＯ法人はたらくらすの石渡様、お願いいたします。

石渡さん：こんにちは。ＮＰＯ法人はたらくらすの石渡と申します。　今、五十嵐さんから最後にお話が合

ったように、子ども弁当という企画について、一緒にやっております。まさにこの場所でプレの活動を行いまして、そのときの様子をまずお見せしたいと思います。

こちらの写真にある１枚なんですけれども、子どもが主体的に料理をつくって振る舞うというイベント、子ども弁当というのをやっていこうということで、今、１回目は試験的にスタッフの子どもと一緒にやってみました。

本当にこれは、私どもは大応援しておりまして、そこにやっぱり子どもが役割を担っていけるようになるということですとか、子どもの居場所にもつながるのではないかというふうな可能性を持っておりまして、もう本当に大応援しております。

そして、はたらくらすではいろいろな活動をしているんですけれども、私どもは多世代を対象にいろいろな活動をしておりますので、そこを少し御紹介したいと思います。

ガーデンダンスというのは、この地域をもっと好きになっていただきたい、皆さんに好きになっていただきたいということで、ダンスをつくっていたりですとか、こちらの敷地内にあるタリーズコーヒーショップさんにおきまして、いろいろなワークショップを行っています。ここでも多世代において好きが見つかるとか、大人の居場所が見つかったらいいなということを思いながらやっております。

東芝未来科学館さんとでは、親子の学び舎ということで、親も学ぶ、子も学ぶということで、学びのプログラムをやっております。

また、夢見ヶ崎動物公園を舞台にした絵本づくりをまさ出版というプロの手を借りて、地域の魅力を発信し、また、地元愛を育むきっかけになればと思ってやっております。

このような活動をはたらくらすではやっているんですけれども、私の、なぜこういうことをやっているのかというところを、少しお話しできればと思います。

きっかけは生い立ちにありということで、この写真なんですけど、こちらが私で、こっち側が２歳下の妹で、ここにいる大人二人は親じゃないんですね。ダイビングショップを経営しておりまして、そのお客さんに囲まれている１枚であります。このように親ではない大人と交流をするような幼少期、今で言うところの斜めの関係の中で育ったかなというふうに思っています。

幼少期はとても泣き虫で、学校でも泣き虫、泣き虫とからかわれて、すごい気にする子でした。自分の思いを伝えられない子だったので、塞ぎがちになって、学校も余り嫌いになって、余り好きじゃない、嫌い、嫌い、嫌いみたいな幼少期でした。でも、このキャンプが私の居場所でした。キャンプでは、泣き虫の私のままるっと受け入れてくれる仲間と大人がいました。そういう雰囲気をつくってくれている多世代の大人たち。日々違う仕事をしているけれども、このときは集結する異業種で多世代の大人たちがそういう居場所をつくってくれました。

そして、大人になって結婚して、出産してというところ、子育てを幸区でずっとやってきました。今、小５、小３、年長の男の子３人を幸区で育てています。大切にしてきたことは、身近な自然の中で育つとか、子どもが好奇心を原動力に表現するというのをとことんやってきました。という結果です。

家でのこういう大切にしたい思いだけでは飽き足らず、幼稚園、保育園に通わせないで、自主保育、手づくりようちえんまんまるというのを長男が２歳のころに立ち上げました。たっぷりな時間の中で、自由に過ごすということを過ごした息子たちは、考える時間がとてもとても多くあって、考えられる子になったかなと思っています。そして、主体的とか、創造性があるというような育ちをしていったかなというふうに思っています。

こういう土台があって、はたらくらすを立ち上げました。はたらくらすでは、誰もが自然体で生きる街の学校をつくっていきます。

一番最初に紹介した活動も、もう初めの一歩というか、やり始めていることです。このコンテンツをもっともっと増やしていって、学びをもっともっと深くしていって、つながる人ももっと増やしていく。地域の

方々、行政の方々だけではなく、民間の方ですとか、さまざまな立場の方々と一緒に手を組むことによって、成長が加速するというか、エネルギーが増大するというのを今の時点でも感じているので、もっともっとそこを叶えていきたいと思っています。一人ひとりの面白そう、やってみたい、参加する側も担い手もそこを原動力にして、どんどん活動を広げていきたいなと思っております。

今後ともよろしくお願いいたします。御清聴ありがとうございました。

（拍手）

司会：ありがとうございました。

次に、国際子育てクラブトントンの池田様、お願いいたします。

池田さん：こんにちは。幸国際子育てクラブトントンの池田です。

トントンは、１９９６年１１月に設立して、今年で２２年になります。近くに住んでいた中国の方と韓国の方と私で、３人で外国人の子育てを支援しようと立ち上げたグループです。

その当時、私は幸市民館で日本語のボランティアをしていて、私自身が自分の子どもを連れて参加していたからだと思いますが、子どものことをもっと話したい、子育てについて話したいという外国人の声が上がり、それがトントンをつくったきっかけです。

当時、幸市民館の職員の方たちと相談しながら、１年ぐらいかけて準備をしました。

当初集まったのは、私と１０人の外国人でした。私は、やったと思ったんですが、参加された外国人の方から、日本人はいないの、日本人の話が聞きたいというふうに言われました。要するに、日本の文化、習慣がわからないということがあって、日本人のお母さんたちの話を聞きたいということで、広報すれば日本人の方はたくさん集まってくるので、日本人と外国人ママがほぼ半々ぐらいで２０年間、細々と活動を続けています。

それから２０年たって、外国人の状況も変わり、保育園に入園しやすくなったせいもあるのか、活動に参加する外国の方たちが減ってきました。現在は各国の絵本を外国語と日本語で紹介する絵本の読み聞かせを図書館と一緒に活動しています。その他、小学校の国際理解の授業ですとか、多文化共生の授業に協力をしたり、あと、外国のママ、パパが日本語学習をしているときに保育の協力。あとは料理教室の派遣ですとか、子育ての相談をしている状況です。

私が課題を話すよりも、外国の方がつくった映像作品があります。それを御覧いただきたいと思います。

（幸国際子育てトントン映像作品　上映）

池田さん：ありがとうございました。作品はこの２倍ぐらいあるんですが、ちょっと時間の関係で前半だけ見ていただきました。

外国につながる子どもたちは、自分の意思で日本に来た訳ではありません。また、外国につながる子どもというのは、外国から来た子どもだけでなく、日本生まれの子もいます。保護者の方が日本語ができない方もいらっしゃいます。帰国児童生徒、いわゆる帰国子女の方たちもいます。国籍に関係なく、いろんな言葉の中で育つ子どもたちのことです。

子どもたちだけでなく、日本の文化習慣が分からない、見えない保護者の方、親も支えていく必要があります。

以上です。

（拍手）

司会：ありがとうございました。
　次に、東小倉小学校、地域の寺子屋事業の中島様、雨宮様。
　中島様、よろしくお願いいたします。

中島さん：寺子屋事業、東小倉小学校でコーディネーターをしております中島です。よろしくお願いします。
　この写真は毎週火曜日に行っています、定例のクラブ会事業の風景です。子どもたちは受付をして、その後３０分間学習をします。学習はいわゆる国語、算数なんかを行うんですけれども、それとプリント、そういうものを行います。その３０分の学習が終わったら、次の３０分間は遊びの時間なんです。この遊びは、毎回三つずつ我々が準備していまして、子どもたちが自由にどの遊びかに参加します。このマジックはとても人気があって、その日のほとんどの子どもたちはマジックに来ています。それと、お手玉とか、大体三つずつ行っています。それも終わると、帰りにスタンプを押すんですけど、このスタンプは寺っこスタンプで、毎回変えています。子どもたちはそのカードのスタンプがとても楽しみであって、とても人気があります。
　１時間終えて、我々は今度は反省会をします。その日、どういうことが課題であったか、どうしたらいいかということを行います。
　寺子屋の柱のもう一つは体験学習です。先ほどの毎週火曜日に行っているのは、対象が１年生と２年生です。体験学習は全学年です。ただし月１回で、第二土曜日に行っています。
　今年のテーマは九つありまして、この中のブルーのものは新規に今年入れたものです。
　これは参加している子どものお一人の方が作文をお書きになって、先生がこんなのを書きましたよといただいたものです。１年１組きたはらあおいさんです。
　私の好きなところは寺子屋です。いろんな地域の人がいろんなことを教えてくれるからです。一番好きな遊びはマジックが好きです。地域の人はとても優しく好きです。先生も行ってみてほしいです。私は寺子屋は遊びの国と思います。寺子屋はとても面白い遊びもいっぱいあります。でも、私は友達がいるともっと楽しくなります。私のやって一番面白かったのは、やっぱりマジックです、という感想をいただいています。
　これは参加されている寺子屋先生は大体今５０名ほど見えるんですけれども、この方たちの感想です。
　地域で寺子屋先生と声をかけられて、とても嬉しかった。
　隣の町内会の方と知り合いになれた。
　駒のひもが巻けずに苦戦した子が、最後は巻けるようになってよかった。
　子どもたちが笑顔で帰るので、こちらも嬉しくなる。
　子どもたちが寺子屋を楽しみにしており、頑張ろうと思った、ということです。
　最後に、私ども東小倉小学校寺子屋で大事にしている五つのことをお話しします。
　１番目は、子どもたちが笑顔で帰ること。子どもたちが笑顔で帰るためには、まず褒めることです。いろんな観察をして褒めることです。
　２点目が、公平に接する。発達障害の子どもさんがいます。いろんな方がいます。全ての子どもさんを公平に接する。
　３点目は、先ほどの寺っこスタンプを面白くする。この三つがあると、間違いなく子どもたちは笑顔で帰ることができます。
　２点目、ボランティアが笑顔で帰る。これは当然、子どもたちが笑顔で帰れば、ボランティアの方も笑顔で帰ります。
　３点目、アセスメント、評価する。私どもの寺子屋事業は本当にいい方向に行っているのか、間違ってい

ないのかということを常に評価していく。それは必要だと思います。そのためにはアンケートをとったり、振り返りの時間で課題があるかどうかを検討していく、こういうことを行っています。

４点目、準備にたっぷりと時間をかける。やはり準備をたくさん時間をかけたものはいい成果につながっています。体験学習も１年前から準備して、今、行っています。

５点目、これも最も大事だと思っていますけども、寺子屋先生は地域を中心に優先する。寺子屋事業のコンセプトはシニア、地域のシニアの方が地域の子どもをサポートするということになります。ですから、当然寺子屋先生は地域から選んでいくということが基本になると思います。

以上です。どうもありがとうございました。

（拍手）

司会：ありがとうございました。

さまざまな活動の御報告、本当にありがとうございました。冒頭の佐藤さんの問いかけにも答えになり得るようなたくさんの示唆があったかと思います。

それでは、ただいまより市長との意見交換に入りますが、その前に今回の車座集会のテーマに関連して、質問を御用意させていただきましたので、質問に関する御意見をお配りさせていただいておりますボードが２枚ございますので、こちらのほうに御記入していただきますようお願いいたします。

質問は、１問目が「子どものサインをどう察知し、どう関わってきましたか」、２枚目が「今後の展望は？そのために何が必要？」の２問となります。

恐れ入りますが、これからおおよそ１０分程度で記載していただきますよう、お願いいたします。

（回答記入）

司会：それでは、市長との意見交換に移らせていただきたいと思います。まずは１枚目の質問について、意見交換をしていきたいと思います。

それでは、市長、よろしくお願いいたします。

＜意見交換＞

市長：改めまして、よろしくお願いいたします。

まずは、４団体の皆さん、発表をありがとうございました。

それでは、フリップを見せていただけますでしょうか。

一つ目の課題が、「子どものサインをどう察知し、どう関わってきましたか？」ということですけども、幸区盛り上げ隊の倉林さんは、「子どもの表情、言葉でサインをキャッチ。流さずきちんと目を見て聞いてあげる」、ちょっと補足していただいていいですか。

倉林さん：初めまして、幸区盛り上げ隊の倉林と申します。よろしくお願いいたします。

私が５歳と０歳の子どもがおりまして、いつもいろいろ会話をしているんですけれども、やはり５歳にもなるときちんと自分の感情というか、きちんと自分の言葉が出てくる年齢になりまして、やはりいろいろ５歳の子ってやっぱり思っていることがあると、ちょっと表情が暗かったりとか、あと、ちょっとママに怒られた後とかって、絶対ママのこと大好きだよと言ってくれるんですよね。そのときに流さず、ママも、えいたというので、えいたのこと大好きだよとか、そういうふうに返してあげるとか、絶対に何か表情だったり、言葉でサインを送っているんですね、子どもって。それを、分かった、分かったという感じで流さずに、きちんと目を見て向き合って、子どもの気持ちを聞いてあげる、そういったことが必要かなと思って、私自身

が気をつけていることというか、そこを書きました。

市長：ありがとうございます。
　それでは、地域の今、親子の関係という中で、こういうのは見逃しちゃいけないなという視点というのを言っていただきましたけれども、御自身の子ども以外のこと、地域の子どもたちについては、どういう視点がありますかね。
　土倉さん、ちょっとよろしいですか。

土倉さん：住民の交流拠点陽だまりで、陽だまりというのはちょうど１１年目になりまして、昨年１０周年をやったばかりです。
　それで、普通は高齢者は高齢者、子どもは子どもの集まりがあるんですが、ここはもう幼児から大人まで一緒に交流しております。それで、その中で子どもとの交流がだんだんできてきまして、初めは同じ高齢者が多くて子どもが来なかったんですが、あるとき子どものグループが遊びに来まして、それから学校で口コミで広がりまして、カードをつくってもらうのが、会員になりたいのが大勢出てきまして、子どもと大人の交流が始まりました。
　それで、私にとっては予想もしていなかったんですが、今度は中学生になると、反対に小学生の子どもを見るために、反対にそれからお年寄りと会話をするように、反対にボランティアになって現れてくれている。
　１０周年で一番嬉しかったことは、今日も髙橋さんという人が見えていますけど、子どものころ陽だまりにいて、大人との交流をしていて、それでだんだん中学生になって、今度はボランティアとして陽だまりを手伝ってくれて、大学生になりましたら、今度は福祉になれて、福祉の世界であれをやりたいと福祉の大学に行っていまして、今日は今ちょっと見えていますから。

市長：早速ですが、すばらしい。髙橋さん、今のお話の髙橋さんですか。よろしくお願いします。
　今、大学生ですか。

髙橋さん：大学３年生です。

市長：中学生のときに陽だまりに行っていた。小学生から。

髙橋さん：小学生のときに友達に声をかけられて一緒に行って、そこであやとりとか折り紙とかを教えてもらいながら、交流をしました、陽だまりで。

市長：なるほど。さっきのお話でも出てきましたけども、プレゼンテーションの中でもですね。
　ずっと離れたシニアが見るというのも、すごくいい視点もあると思うんですが、若い世代が若い子を見る、いわゆる斜めの関係で子どものサインを、あれこの子大丈夫かなというような、そういうような事例ってありますか。こういうところに気付くんだよねというのは。

髙橋さん：つばきさんのところで、私はボランティアをさせてもらっているんですけど、そのときにみんなで最後の反省会とかをしているときに、やっぱり関わる中で甘えてくる、すごい甘えてくる子どもとか、あとはちょっと言葉遣いが悪かったりとか、多分そういう子どもの態度でこっちが気付くことはすごいあると思います。

市長：なるほど。言葉遣いだとか、そういうところですね。
　今、阿部さんが見守るというような形で書いていただいていますかね。ちょっと御紹介していただいてよろしいですか。

阿部さん：私たちはプレーパークを開催している団体なんですけれども、プレーパークは自分の責任で自由に遊ぶというモットーがありまして、大人は見守りのためにおりますが、なるべく口出し、手出しはしないということを心がけています。
　なので、もし子ども同士でトラブルになったとしても、しばらくはどういう方向に向かっていくかということを見守ります。そこで、子ども同士で解決ができれば、それでもう本当に、そういういろんな社会性を身につけていくための一歩にもなるというふうに考えますので、それはもうそれで良かったねということで終わります。
　どうしても子ども同士で解決ができなかったりとか、あとは手が出てきたりとか、ちょっとけがが心配な状況になってきたときに、待って待って、ちょっとどうしたのといって介入をしていきます。その場合も、双方の話をちゃんと聞いて、その上でどうしたいというふうに子どもが考えていくようにもっていくようにというふうに、常に心がけています。

市長：なるほど、ありがとうございます。
　ちょっと皆さんの視点を、私も含めて合わせていきたいんですけども、最初の区役所からのプレゼンテーションの中にあった、青の段階、黄色の段階、赤の段階というふうなことで指標をちょっと書かせていただいたと思いますが、いわゆる赤という表現がちょっといいか悪いかは別にして、本当にいわゆる専門家とか、いわゆる支援機関だとかというのが介入して、しっかりとまず救うというふうな最後のセーフティーネットというふうなのは行政でしっかりいろんなものがあるよと。だけど、いわゆる黄色の、何か、ちょっとおかしい、大丈夫かな、支援必要かなとか、問題行動が出てきたんじゃないかとか、あるいは生活リズムが乱れ、孤立しがちなんじゃないかと、先ほどのプレゼンテーションでもありましたけど、どうも駅前でたむろしているけど、どうしてなんだろうというふうなところを、どうやって気付いてあげられるかということで、そこに対してどういう取り組みかということなんですけども、それぞれのいい御発言がございました。
　プレーパークの中でもそういった気付きというふうなものが出てくる。まず見守ってみるけどもということもあるでしょうし、大塚さんのところは、ちょっと御紹介して、しつこくやってみるという最後気になる言葉があったので。

大塚さん：地域教育会議ということですので、何か直接的に子どもと関わるというのはないといいますか、イベント等を通じて子どもたちと関わるんですが、いわゆるいい子が集まってくるということで、そういう意味で今の命題のサインというところでは、なかなかそういうところじゃ見つけにくいということで、僕個人的ですけど、地域の中で実験的に子どもたちに挨拶をし続けたらどうなるんだろうかというようなことを一度考えまして、１０年ぐらい前から、小さいころから実は挨拶をするということを大事にしたいんですね。しつこくやっていると、小さいうちは本当に、小さいというのは小学生ぐらいまで、児童ぐらいまでは挨拶は返してくれるんですが、今は高校生ぐらいまでになっているんですが、やはりなかなか挨拶をしてくれない。それから、逆に今度はこっちも怖くなっちゃって、たむろしている場合もありますので、タイミングを見て挨拶をするんですけど、とにかくそういうところでちょっとそういうサインといいますか、そういう意味では今までにこにこ、挨拶をするときは必ずほほ笑むといいますか、優しい顔で挨拶はしてくれましたので、その辺のところはどんなふうに変わっていくのかなというところは見てきましたけど、幸い皆さん、ちゃんと普通に赤信号も黄色信号もなく今のところ過ごしていますので、そういう意味では、ただ、とにかく

その地域の中でつながるという点で、見かけたときに危なくないなと必ず挨拶はちょっと遠くからもして、だから、今は３人ぐらいいるんですけど、２人ぐらいは逆に必ず向こうからも見つけて挨拶してくれるようにもなっていますし、そういう関係はつくれるので、常に地域の中でそういう地道に一つひとつ、その中で例えばちょっとそういう生活の乱れ、または対応の仕方とか、そういう変化について察知できたらいいのかなと。

市長：それは、見守りというのは朝ですか。

大塚さん：朝も夕もですね。おはよう、こんばんは、こんにちは、全てやります。近所ですから、生活時間帯がいろいろありますけど。ただ、小学生のころって結構顔が見えるんですよ。ところが中学生になると、部活とかあるんでしょうね。なかなか休日でも見えにくくなるというのをちょっと感じていますね。高校生になるとなおさらですね。

市長：なるほど。確かにそうかもしれませんね。中学生ぐらいになるとちょっと見えづらくなってくる。
　中学生の段階で、こういうところを気付いて、地域の中でこういうところを気付いたよ、サインを見つけたよという方というのは、ちょっと手を挙げてもらっていいですか。
　実際、自分たちの活動の中で、五十嵐さん。

五十嵐（努）さん：小学校というのは、幾つかのところで太鼓を教えているんですけれども、太鼓を教えている子ども自体は５年生とか６年生なんですけれども、その学校から見ると、余り素行のよくない子どもが、太鼓の授業の中ではリーダーシップを発揮したりして。だから、事業の中でも私と接する時間が、特にやっぱりそういう問題を抱えた子の場合は濃密になるんですね。そうすると、まちで会ったときに、二、三日前も会ったんだけど、バイクにまたがった五、六人の集団が幸市民館のところでたむろしていて、私がたまたま横を通りかかったんですけれども、一人が私に言ったわけじゃないけど、腹減ったと言ったんですよ。腹減ったって。私、振り向けざまに、たまたまどら焼きを持っていたもので、腹減ったんだったらどら焼き食うと言ったら、食べたいと言うから、５個子どもたちに与えたら、そのうちの一人が五十嵐先生ですよね。どこの学校と言ったら、太鼓を教えたところの子どもだったり。
　だから、よく夕方、太鼓を教えたそういう子どもたちで、素行もよくない子どもたちが飢えているときには、必ず声掛けとして飯、食ったかと。飯食ってねえと大体悪いことをするからという話をして、私が今こども食堂をやっているのは、そこら辺が原点になっていますね。
　それとあともう一つだけ、サインのところでいくと、個人的に言えば、やっぱり子どもたちだけじゃなくて親にもやっぱり支援がすごく必要だと思って、それはすごく早い時期がいいな。今、うちのこども食堂は、赤ん坊とか小さいお子さんを抱えた親子で来ているケースが多いんですよ。そこはすごく居場所になっていて、早い時期にやっぱりネットワークをつくってあげれば、子どもにとってもいいのかなと。
　自分の子どものときに、ここからサインなんですけど、家で殴られて育った子は、大人が近くに寄っただけで頭を抱えるんですよね。別に叩こうと思って私が寄っているわけじゃないんだけど、頭を抱えるような仕草をしている子というのは、大体家で、虐待まで、さっきの赤信号、黄色信号ということでいくと、赤信号まではいかないんでしょうけれども黄色信号で、とにかく親の腹立ち紛れに叩かれているお子さんなんかの場合はそういう対応をしたり、あとはやっぱり着るものとか、しっかり食べていない、虫歯があるとか、衣服の問題というのは見れば分かりますしね。いろんな子どもたちの行動のところで、気をつけていればかなりわかるサインはあるんではないかなというふうに思っています。
　以上です。

市長：ありがとうございます。
　さっきの、もう一人の五十嵐さん。先ほどの五十嵐さんのプレゼンだったですかね。洋服が、例えば着がえていないとかという、冬でも半そで、短パンでとかという、というふうな気付きというのがある。
　逆に、学校ではそんな気付かなかったのかなというふうに思っちゃいますけども。

五十嵐（潤）さん：一応、その子自身がどうなったかというのは、まだはっきりはわからないんですが、実際、学校の中でも３０人、４０人いれば、学校の先生も見切れない子どもというのはやっぱりいるんですよね。全員見切れるはずがないんですよ。もちろんコーディネーターさんですとか、さまざま配置等をされている学校もありますけれども、それでも見切れなくなってしまっている子どもがやっぱりいるのかなというのは、特に今回活動していて感じるところです。

市長：ありがとうございます。
　実際、さっきも控室のところで話していたんですけれども、家庭訪問なんて昔はすごく自宅の中まで入ってというのが、各学校ごとに随分とその形態が違うというので、家の中に入るケースもあれば玄関先、あるいはもっとすると、玄関先には親の都合がつかないということで、いろいろ学校によっても随分取り組み方が違うというので、なかなか家庭の事情まで知る、学校の先生が知るということも、昔のようにいかなくなってきているということですから、全てを学校にというふうな形というのは、これはもういかないことは皆さん御承知のとおりだと思うんです。
　ですから、例えば先ほど中島さんの寺子屋で発見したり、大塚さんが地域の中で挨拶活動をしていただいたり、プレーパークの中だったりとかという、あるいはいろんな陽だまりさんのところだとかということのチャンネルをいっぱいつくっていって、どこかで発見していかなくちゃいけないという、アンテナを立ててということなんだと思いますけども、中島さんのここの非常に興味深いことが書かれているので、御発言いただいてもよろしいですか。

中島さん：我々の寺子屋はどんな子どもたちも受け入れているんで、だから、初めからこの子は発達障害というラベリングをしていないわけですね。そうすると、一緒に学習とか遊びをしているときに、非常に奇声を発生したり、それとかぐるぐる回ったりとか、急にずっと泣き出したりするんですね。だけども、そういう子どもたちに対して、我々は基本的には静かにしろとか何とかって言いたくなるんですけども、だけども、子どもたち自身は何も迷惑をしていないんですよ。そこがすごいと思うんですけども。
　それでも、そういう泣いている子とか、いろんな鈴の音、敏感な子に関しては、丁寧に一人の寺子屋先生がずっと１時間付き合っているんですね。そうすることによって、多分その子にとっては寺子屋が一番自由で安心できる場だから、そういうふうにいろいろするんだろうということでみんなが解釈して、教室の中ではいろいろあっても、教室の中で鈴を鳴らしたら怒られるんですけども、寺子屋に来ればそれも許されるというか、子どもたち自身が迷惑していないのが我々ほっとするんですけども、それでも何かがあるからそういうふうになるんだろうということで、付き添っている。
　そういうことで、四、五十人の寺子屋先生がいますから、みんな丁寧に観察して、ただ、この子がこういうことになったということは反省会でするんですけども、だからその子はこうだというふうにせずに、次のときにいろいろ、また笑うようになったというとみんな喜んで、ああ良かったねと、そういうふうにしていますよね。

市長：ありがとうございます。

先ほど、冒頭の佐藤さんのプレゼンテーションの中で、寺子屋だとか、あるいは居場所だとかというので、自分ではないけどお友達がそういったもので助かったというか、救われたというふうな思いであったというような御発言があって、ですから、そういう意味では佐藤さんも自分も気付かない誰かの支援があったのかもしれないというふうな御発言がありましたけれども、やはり必ずしもこの子に対してこの方策が合うかというのは、それは分からないので、ですからいろんな多チャンネルというか、いろいろあったほうがいいというのが多分一つの答えなんだろうかと思いますけれども、いかに大人がその目線を持っているかというのがすごく大事かなと思います。

佐藤さん、もしコメントがあれば、今までの発言の中から、あるいは、実はこういう子どものサインというのがあるんじゃないかなみたいなことというのは、何かありますかね。

これだけやっぱり川崎市内の中で、中学生、小学生の不登校が増えてきているという現状は、もう少し気付けたんじゃないかなというふうに思えるんですけど、もう少しこういうふうにしたら不登校じゃなかったかなとか、あるいはお友達でもたくさん、冒頭あったように不登校の友達というか、いたよ、同じ学年に。こういうふうになっていればもっと良かったんじゃないかと思うようなことってありますか。

佐藤さん：頭ごなしに怒るんじゃなくて、話を聞いてくれる人がいなかったと思うんですよ。先生も忙しそうだし、親も忙しいし、かといって友達だと話になんないんじゃないかみたいな。でも、自分はいろんな人の話を聞いて、何て言えばいいんですかね。

市長：例えばあれですかね。ちょっと先ほども話がありましたけど、学校に余り関係のないところのほうが、きっかけとして入りやすい。

佐藤さん：多分そうかもしれない。自分と本当にもう何も関係のない人が助けてくれるというのが、やっぱり一番いいのかなという。そういう人のほうが気兼ねないといいますか、変に気を使わなくていいからさらけ出せるのかなと思ったり、普通のいつも顔を合わせている人と話すより、本当に知らない人と話したほうが全然話が進んだり、多分そういうのがあるんじゃないかなと思っています。

市長：ありがとうございます。

確かにそうかなという気がしますね。自分の生活している中で、この人とは会いたくないな、しゃべりたくないなというのを、そのまま引きずってというのはなかなか難しいですよね。だから、またちょっと違う視点でもって、気兼ねなく話を聞いてくれる人がいる、ちょっと話せる人がいるというだけでも随分違うかなというのは、今の佐藤さんだと思うんですけれども。

すみません、岡田さんも何かちょっとコメントいただいていいですか。

岡田さん：まさに多分そのとおりで、普段関わりのない人に話せるってとっても大事だと思っています。

私たちはここを完全に自由に誰でも出入りができますよということで開放して、実際に今一番使っているのは子どもたちということで、老人ホームなどに今、住んでいる人より子どもたちのほうが普段多いというのがありますが、毎日来る子たちとか、本当に顔馴染みの子たちから、たまにやって来る子たちまでいますけども、積極的にこちらから話しかけたりすることは余りしないで、普段からどんな生活をしているのかな、今日はどうやって過ごすのかなというふうに見ていますけど、そんなときに、ちょっとしたときに、声をかけ合ったりとかね、一言が何かつながるときって多分あると思うんですよ。そういうときに、全然知らない人が実はこんなコメントをくれたとかって結構刺さるので、そういうときに出番というのが一つ役割としてはあるのかなというのは、ちょっと意識はしているところです。

ただ、今のところ皆さん楽しそうに過ごしている人たちばかりなので、ここに来る子たち以外の子たちはどこで過ごしているのかな、なんていうのを想像しながら今いるところですけどね。

市長：夜になると、ここに例えばたむろしているとかというのはないですか。

岡田さん：そうですね。夜遅く帰るときにはやっぱりいるんですよ。でも、数人でいるんですけど、最初は何かちょっとね、いろいろあったところもあるんですけど、僕が見かけるときには、やっぱり何人か、３人ぐらいそこでしゃべっていたりする子たちがいますけども、僕はこういうレンガの壁とかがあったら、すごい落書きまみれになるんじゃないかとか思ったんですけど、意外とそういうのもないということで、何か話をしている。それって、いいことか悪いことかわからないけど、話をする相手がいるというのは、まあまあありかなと思います。

市長：そういうところに五十嵐さんみたいな方が出てきて、どら焼き食べるかというふうなお父さんが出てくると、何か話がつながってくる。または、地域の活動にどこか、子ども会の役員の方と会えたとかというのが出てくるかもしれないですね。

土倉さん：私が、危険サイン、夏休みの期間にがらっと変わるんですよ、子どもが。それで、やはり普段きちんと、個々ではすごくいい子なんですけど、集団になるとすごくやっぱりやんちゃになって騒ぎますと。いい例がお祭りなんですよね。お祭りになると、みんな集団で、今まできちっと髪の毛をしていたのが金髪に染めたりとか。対策としまして、うちのほうの小倉神社のお祭りには、中学校と小学校の先生にみんな参加してもらっているんですよ。そうすると、先生がいるとそういう態度がとれなくなってくるんで、だから、普段見せたことのない顔が先生に出て、びっくりすることもあるんで、それでうまく乗り切れればあれなんですけど、やっぱり集団になると多少悪い、たばこを吸ったりとか、集団でたむろして、夜遅くまでとか、そういうような傾向、その辺を先生たちに見つけてもらいたいと思いまして、先生も迷惑だと思うんですが、呼んでいるんです。

市長：一つ、このどうやってサインに気付くかということの一つ目の質問から、そろそろ次の、そのために気付いて、二つ目の質問のほうでフリップを出していただければと思うんですけども。

質問が、「今後の展望は？そのために何が必要？」ということですけども、同じように気付いて、そこから赤にならないように、どういうふうにしていくかということの質問ですけども、ちょっと一気に見れないですね。

庄司さん、ちょっと、ひよし食堂の会の庄司さんからちょっとお話しいただきたいと思いますが。

庄司さん：ひよし食堂の会の庄司です。

今後の展望ということで、子どもたちが安心していられる場所が、地域のあちこちに、これは一つじゃだめで、今もたくさんの方がつくっていらっしゃるのが、もっともっとたくさんあることによって、子どもたちが安心して来れる場所となるというふうに思います。少ないと、あそこに行っているよとか、そういったマイナスイメージで見られることもあるんですよね。そういったことが必要かなと思います。

最近私がよく感じるのは、自己肯定感の少ない子どもがすごく増えているんだよということ。学校のいろいろなところに出前授業とかに行きますと聞くんですね。やっぱり、その子どもたちが黄色サインまではいかない、黄色信号までは行かないけど、青信号と黄色信号の間にいる子たちがいっぱいいるんじゃないかなと思うんです。そういった子たちが、やっぱり地域の大人とか地域の人とも触れ合って、友達ともちょっと

離れた関係でも触れ合えるような場所があちこちにあるといいなということと、あと、子どもを気にかけている大人はたくさんいるんですよね。その大人も、何か手助けがしたいとか、何か私も社会の一助になりたいと思っている方も、そういう場があることで力を発揮できるというふうになっていくと思うので、そんな場がいっぱい欲しいなというふうに強く思います。

市長：ありがとうございます。
　中島さんとともに、一緒に東小倉小で食堂で寺子屋をやっていただいた雨宮さんですね。
　これ、ちょっとお伺いしたいんですけども、先ほど中島さんから、寺子屋先生は５０人ぐらいいらっしゃるというふうに聞きました。この方たちは、これまでに何らかの地域でボランティア活動とかをしていた方ですか。ちょっと簡略的な話でもいいので、よろしいですか。

雨宮さん：ほとんどないと思います。ましてや、子どもを見るとか、教育関係に携わっていた方でない一般企業の方が多いんです。

市長：教育関係というのは、逆に余りいない。

雨宮さん：そうですね。少ないですね。やっぱり私たち１０８人の小さな子どもたちを見るんですけど、最初は５０人もいる方たちが、先ほど不登校で、頭ごなしに大人から言われて聞いてくれないというような話があって、あれって心にきていたんですけど、やっぱり最初はボランティアの方々も、そういうちょっと目につく子とか特別支援が必要な子たちに対する昔流の考え方で、やっぱり聞かないで出ていくようなとか、または高い場所から叱咤するような、最初はそういう集団だったと思うんですね。でも、やっぱり私たちは中島さんがさっき言ったように、子どもが楽しく遊べて、元気に帰ってくれるのが唯一の目標だということで、じゃあ、どういうふうにしたらいいかということを重々いろいろと毎回の後に振り返りを行い、そして、私たちがやっぱりボランティア集団としてすごく成長してきているなと、そういうことを思いますね。
　今、いろいろ話を聞いてみて、今、私たちが教えているというか、関わっている子は１、２年生なんですね。でも、ここを卒業していった子たちは、地域で中学生、高校生、大学生と迎えるんですね。そうすると、私たちはその関わった子たちと地域で挨拶ができるようになる。覚える。
　場所を提供する、とてもいいことです。でも、人と人との関わりですね。そういう構築ができることによって信頼関係がつながっていくという、そういうこともとても大切かなと。それと、ここへ声もかけやすい、向こうのほうも知っているおじいちゃん、おばあちゃんというような形で、成長していく地域でありたいなというふうに思います。

市長：ありがとうございました。
　驚きですけど、５０人ぐらい寺子屋先生がいて、ほとんどがボランティア初経験。余り教育関係者もほとんどいずということで、地域人材が出てきているというのは、先ほど庄司さんが言われたような、こども食堂みたいなところもそうだし、寺子屋みたいなところもそうだし、いろんな場所がたくさんある。いろんな地域の人たち、潜在的に何かやりたいなと思っている人たちの受け皿になるような活動だとか場だったりというのが多ければ多いほど、ある意味子どもたちからのサインを見逃すことがなくなってくるんではないかという気がするんですが。
　土倉さん、発言多くなってきちゃったかな。どうでしょう、ちょっと私、発言したいという方、いらっしゃいますか。なかなか見えないんですよね。ごめんなさい、ちょっと見せていただいていいですか。
　林さん、村橋さんかな。ちょっと村橋さんからお話しいただいていいですか。

村橋さん：夢見ヶ崎プレーパークをつくる会の村橋です。
　もう既にやっていらっしゃる方もいらっしゃるんですけれども、子どもが安心してふらっと行けてという、そういう場所がもっともっと増えて、たくさんないと、遠いと子どもたちは歩きや自転車で行かれないので、地域にもっとたくさんできるといいなと思います。
　そこに、私も関係ない大人に話せるという、友達に話すんじゃなくて、親に話すんじゃなくて、知らないおじさん、おばさんに話す、ちょっと上のおじさん、おばさんに話すというのが、子どもたちもよく育っていくんじゃないかなと思っているので、そういう大人もいる居場所がたくさん欲しいなと思っています。
　あと、もう一つ思うのが、サインを出している子ども、危ないなと思っている子ども、あとは不登校などにもうなってしまっている子どもたちを救うことも大事なんですけれども、そうさせてしまった原因は何かというところをもう少し深く見て、本当はそちら側の人たちにも支援が、子どもに対してだったら親だったりとか、学校のことだったら子どもの友達、相手側の子どもに対しての支援もすごく必要なんじゃないかなというふうに考えています。

市長：ありがとうございます。とてもすばらしい、すてきな視点をいただきました。
　当事者はもちろんのこと、その関係している親だったり、周りの人だったり、お友達だったりというところへの働きかけというのも重要なんじゃないかと、すごく大切な視点をいただきました。ありがとうございます。
　五十嵐さんが学校と連携というふうな話を、ちょっと御発言いただけますか。

五十嵐（潤）さん：まず、小学校に通われている方であれば、基本的にはその小学校の先生が多く見守りをする一時的な居場所になっているというふうに考えていますので、そこで出てきた子どものサイン、特に私たちも一応市民団体としてやらせていただいていますけれども、見守りの目というのは、決して専門的な洗練された目ではないというふうに私は自分のことを考えております。そのため、専門的な目を持った小学校の先生等がまず拾い上げていただいて、それで学校でこれ以上例えばやりきれない方がいれば市民団体に投げていただくですとか、そうしたことをすると、より一層一つ拠点をつくったとしても人数のほうも充実されるだろうと。
　あと、もう一つ、いざ人数が充実したときに、次にどんな課題が出るかといえば、今度は場所の確保なんですね。場所を確保する際、今、幸区の社会福祉協議会様のところで場所をお借りしてやっているんですけれども、今、子どもがだんだん増えてきて、今は７人ぐらいになりまして、また、たまに来る子もまぜるともっと人数が増えるんですけれども、そうするともっと広い場所が必要になるんですね。その場所が、やっぱり探すと財政的な問題等もあるので、財政的な理由から以上増やすことがしづらいなというところが、ちょっと今課題としてあります。

市長：ありがとうございます。
　石渡さんも、コミュニティリーダーの育成をキーワードに書いていただいていますが。

石渡さん：ありがとうございます。幸せに向かう人間関係を構築できるコミュニティリーダーを育成していきたいと考えています。
　私、さっき話をさせていただいたとおり、幼少期の居場所はキャンプで、それから高校、大学、社会人とずっとキャンプのほうの担い手をやってきた、つまり居場所を子どものために提供してきたという経験はキャンプになります。

そこで、やはり人間関係って難しいなというのを、子どもの参加者のときも思いましたし、私どものキャンプで大きなテーマで掲げていたのは、キャンプを通してグループワークと言っていたんですけれども、人間関係を構築するというための班づくりであり、キャンプ３泊４日を通したプログラムの組み立てというのをやってきました。

やっぱりそこって大きな大きな課題であって、人間関係が良ければ幸せ、つまり幸せなんだなというのを子どもの頃も思いましたし、やっぱりそうだなというのを確認するような日々でもありますので、そこを育てていきたい。

私どもの法人では、さっきのこの信号でいうと、青信号は本当に青なのかというところ。大人、親も青に見せようとしているのではないかと。私どもが行っているワークショップの中にも、コミュニケーションスキルアップ学習会というものがあるんですけれども、そこでもやはり話は夫婦関係とか親子関係とか、突き詰めていくと、結局自分自身との関係ってどうという、自分自身にマイナスな言葉かけは、だめだな自信がないやつだなとか、自分自身に欠けている人って、やっぱり夫婦関係とか人間関係にもほころびが出ている。私はつまりそうだったんですけれども、すごくいつもずっとずっと自信がないというのを自分に言い続けていた時期がずっと長かったので、そんなところから大人にも必要、青信号と言われる人にも必要、そこを我々はつくっていきたいと思っております。

市長：ありがとうございます。

似たような、倉林さんのところにも書いていただいておりますけども、幸区のママ、楽しく暮らせる町に。ちょっと待ってくださいね。

要は先ほどのお話じゃないですけれども、子どもだけじゃなくて、そこを取り巻く環境という意味では、大人たち自身もやはり大丈夫かなという視点からすると、幸区のママが楽しく暮らせる町、リフレッシュのできる場の提供というふうな形で、親同士ということも大事な視点だよねということですよね。ありがとうございます。

ちょっと話を戻すようですけども、これまで御自身の今までの活動団体の以前から、今やっている活動団体の前からボランティア活動に参加されていた方ってどのぐらいいらっしゃいますか、この中に。

半分ぐらいですかね、半分ぐらいです。ありがとうございます。

今日御参加の団体を、この会が始まる前から知っていたよと、半分以上知っていたよという方はどのぐらいいますか。

これは少ないですね。５人ぐらいでしょうか、手を挙げたのは。

全部知っていたよという方はどのぐらいいらっしゃいますか。

今度は一人もいないという形で、実は幸区の中でもお互いのこれだけすばらしい活動をされている皆さんが、余り相互の、誰々さんが何のどんな活動をやっているというふうなことを知らなかったというのは、ちょっと残念というか、もったいない感じがしますね。

さっき冒頭の五十嵐さんのところと石渡さんのところが連携したように、横の団体のつながり、２者、３者、４者というふうなつながりというのができていくと、もっともっと面白いものができていくというか、刺さっていないところも刺さってくるというふうな形になるかもしれませんね。

子ども会さんからも今日お二人来ていただいているので、どうしましょう。どちらか、まず。

道木さん：子ども会なんですけども、こちらの幸区の子ども会というよりは地元の単体の町内会の子ども会という形の要素が大きいと思うんですけれども、先ほどからも出ていましたように、自分が所属する町会というのは、割と地域にコミュニティができているのかなというふうに思います。必ず朝、学校、通学路の商店街の連中は、必ず朝行くときはいってらっしゃい。声が返ってこないと、声がないと怒る人もいますし、

それはそれなりにみんなコミュニケーションをとってもらって、活動をしているかと思います。
　私のほうとしては、自分の息子もやっていたんですけど、町会としては野球であったり、ドッチボールであったり、テニスがあったりという形でいろいろ活動はしているんですけども、その中で１点思うのは、そういった団体に来た子どもたちというのは、大体しゃべる言葉もはきはきしていますし、だんだん試合を通じて勝ってくるとチームワークができて、そうすると今度、何で負けたんだろうというところの反省も自分たちでできるようになります。
　今逆に思うのは、前に１回ありましたけども、お母さん方、お父さん方、今、親も悪いんですけども怒り方を知らないというか、余り自分の子どもに対して怒れない親が多くて、逆にこういった会合の中で嫌な顔をする親が多いんですね。それというのは、子どもからすると、家にいて、ここまで悪さしても怒られない、ここまでは怒られるだんだん次元が上がっていくと、子どもが結構敏感に感じてくるのかな。そこは悪いことは悪い、怒るところは怒る。めり張りをつけて、よかったら褒めてあげるという部分が大事になってくるんじゃないかなというふうに思います。

市長：ありがとうございます。
　齋藤さんのパネルが気になって。

齋藤さん：幸区盛り上げ隊、今、市長がおっしゃったとおり、実は幸区というところが、狭いようで広くて、私の祖父の時代からずっと幸区に住んでいまして、御幸地区とか日吉地区とか小倉地区ですね。この辺が村意識みたいなところがありまして、余り交わることがない不思議な、線路が横断していますから、横須賀線とか。
　そういうところで、実はいろいろなものが見えなかったんですよ。見えない中で、実は私も北部のいろんなママさんたちのイベントとか、毎年フェスをやったりとか、ああいうコミュニティの場所を６年前から手伝っていまして、何で幸区って人が見えないんだ、場所がないんだ、とっても地味だよねというのを２年間言い続けてきて、実は倉林さんが幸区盛り上げ隊つくりますと言ってくれて、非常に分かりやすい名称なんですよね。ですから、幸区を盛り上げたいんですよ。単純なんです。
　こども食堂も、私はちょっとお手伝いとか、北部の野菜をお持ちしたりとか、あと横浜とか川崎でもこども食堂を見ていますし、いろんな寺子屋のそういった活動も存じております。ですけど、そこに行かない子たち、その子たちが本当に赤信号なのかイエローなのか、子どもたちには全然関係ないことであって、本当に赤信号の子たちって本当にいるのというところっていろんな局面からそれを見ると、子どももちろんそうですけども、周りの環境もそうですし、親の問題もあるでしょうし、いろんな今の社会、複雑怪奇になってきて、一応子どもたちの面倒を見たい、何かしてあげたいという、子どもが少ない高齢化時代になっていますから、そういう手助けをしたい、したいという人たちがいっぱいいることは確かなんですよ。ですけど、子どものことを考えると、ちょっと大きなお世話だなとかね、私も小さいときは悪いことが好きだったし、隠れていろんなことをするのがやっぱりおもしろいんですよ、子どもって。だけど、多摩川で中学生が殺害されるような事件というのは絶対起こしてはならないことだと思っていますし、どこかで大人として何か声をかけられるような、ちょっとしたチャンスを見逃さないということというのが多分大事だと思いますし、大きなエリアではなくてもマクロ的に隣近所とか、町会も広くなっちゃうかもしれませんけど、周りにそういう子がいるのかどうか。
　私の家の周りも幼稚園と小学校と中学校の学童のちょうど朝うるさいところなんですけど、そういうところで子どもたちの顔を見ていると、一人でランドセルを重たいようにこう前にしていく子もいれば、周りにそういう子もいれば、楽しく会話をしながら小学校へ行く子どもたちもいるし、親御さんも、うちは四つ角なので、自転車で送った後に１時間ぐらいうちの前でしゃべっているママさんたちもいるわけですよ。

だから、やっぱり何かいろんな手助けの方法はいっぱいあると思うんですが、私はちょっと子どもを見守るような、子どもの力がどのくらいあるのかというのをちょっと見てみたい。それで緊急性があれば、何か手を伸ばすのはもちろんだと思っているんですが、とにかく。

市長：これ、書いてあるのは、検索する、情報を何て書いてあるんですか。

齋藤さん：情報を得る。情報を得るということは、困ったこととか、子どものこととか、いろんなことがあると思いますけど、そこに一番タイムリーに、今一番きちんと情報が得られるのは人なのか、場所なのか、行政なのか分かりませんけど、そういう手段を持ってもらいたいという、そういう検索能力ですよね、と思っています。

市長：ありがとうございます。
本当にまだまだお話を聞きたいんですけども、いずれにしても、先ほどの繰り返しになりますけれども、寺子屋のところで新しいボランティアさんが出てきたというように、いろんな活動をすれば、その分だけまた新しい新規人材を獲得できるのではないかというふうなことを期待しているんですけども、なかなか例えば、最初の冒頭の佐藤さんのお話にあったように、ここに居場所あるよといっても、ただあるよというだけでは、なかなかそこにつながらないというのがあるので、ただ、どこかで口コミじゃないけども、あそこ一緒に行ってみないとかというふうな形があれば、よりいいんですかね。どうなんだろう。ただ、あそこにありますよとボードに張ってありましたというだけでは、なかなかそこにつながらないと思いますか、佐藤さん。

佐藤さん：多分、やっぱりそうだと思うんです。一緒に行ってくれる人がいれば行くかもしれないし、自分から行くこともあるかもしれないという、曖昧なんですよね。でも、やっぱり一人で行ってみようとはならないと思います。自分もやっぱり友達とちょっと行ってみようかなという気持ちにはなるんですけど、一人でじゃあ行ってみようと思わないんですよ。

市長：確かに。それぐらい積極的であったらば、違うところに行っているよねという、そもそもということですよね。

佐藤さん：そもそも友達ができています。

市長：そうですね。そうだと思うんですね。ですから、やっぱりもう一つ踏み込んだ形じゃないと、そこにはつながらないということですよね。そこに非常に難しさというのを感じている訳なんですけども。
冒頭申し上げたように、赤信号のところという最終のいわゆる公助みたいな部分というふうなものは、行政の中でしっかりやっていくという、これはもちろんのことですけども、どうやって地域の中でそのニーズというのを発見していくのかというのを、先ほど齋藤さんが言われたように、幸区っていっても結構大きいよというお話。先ほどあったように、区役所のほうから面積的には一番小さくて、人口も７区の中では一番小さいとは言いながら、これだけ人口がいたら、結構地方に行くと大都市ですよね、ぐらいの人口があって、それでも面積もそこそこあるよって。
ですから、なるべく小さなところで皆さんがやっていただいている活動とか、場というふうなものがいっぱい出てくれば出てくるほど、そのチャンネルが増えていくというか、場という意味でのチャンネルが増えると同時に、関わっている人たちが増えれば増えるほど、リーチしていく確率が上がっていくということに

なるのではなかろうかなというふうに思います。
　是非、ちょっとまとめのほうに入ってきちゃうんですけれども、ここに今日いらっしゃる、先ほど質問したように、活動はしているんだけれども、他の団体は余り知らなかったというふうなのは、これは正直もったいないということなので、お互いがもう少し情報を知り合って、他とも連携できる取り組みってないだろうかと。そして、もっと違う団体がぽこぽこ出てくるような、先輩たちですから、もう活動をしていただいている。それが展開できるような横の支援というふうなものを、是非幸区の中で広げていくと、もっともっと住みやすい地域になるのではないかなと私は思うんですが、区長、どうですかね。ちょっとコメントを、今までの。

区長：皆さん、貴重な意見を本当にありがとうございます。本当に皆さんの熱い声、熱い意見で、目が覚める思いがいたしておりますけれども。
　皆様の活動というのは、行政ではなかなか行けない立場といいますか、先ほどもお話がちょっとありましたけども、学校の先生には相談できない、市役所の職員には相談できない、親にも相談できない、じゃあ、誰に相談すればいいのということになります。それは地域で皆さんが普段から顔を知っていたり、何かしらの居場所を作っていただいて、いろんな形で子どもと接触して、その中からいろんなものを、学校や親からはなかなか話せないようなことを皆さんに聞き取っていただいているというようなことは、本当に行政ではできない、皆様方、地域の団体の皆様の本当のお力でここまでできているんだと思っています。本当に感謝しております。
　じゃあ、行政に何ができるのかと。今回の前に、みんなで一緒に考えました、区役所の中で。何ができるか。三つあります。
　一つは、先ほどちょっと市長もお話ししましたけど、団体間でどういう団体が活動をしているかが分からないという話がある。例えば、子どもの居場所でどこへ行ったらいいか分からない。要は周知を、団体の周知をしたり横の関係ももっとつなげていかなければいけない。それが一つです。
　区の中にも、総合支援のネットワーク会議があったり、また学校の校長先生の校長会があったり、そういうような場でも今日のお話なんかを情報共有していきたいというふうに思っております。
　それと、もう一つ、子どもの支援の団体の交流会がございます。この中でも幾つかの団体の方が入っていらっしゃると思いますけれども、そういった団体の中で、今みたいなこういう話し合いをしながら、お互いの団体で何を活動しているの、この子はどうなのみたいなことで、そういった情報交換もできればいいなというふうなことを考えております。
　それと、最後、赤信号のことがありましたけれども、赤信号になりそうな子どもさん、もしそういう方がいらっしゃいましたら、もちろん区役所のほうに御連絡いただきたい。
　それと、例えば障害のある方が来たり、いろんなことで難しい困難な相談事があると思います。そういったときは、区役所に専門の相談員がいますから、相談に来ていただいたりというようなことで、赤信号になりそうな方がもしいらっしゃったら、早目に区役所のほうにも連絡をいただければというふうに思っています。
　いずれにしても、子どもの笑顔があふれるような、そんな幸区を目指して頑張りたいと思いますので、これからも引き続き御協力、御支援をお願いしたいと思います。ありがとうございます。

市長：ありがとうございました。
　誤解なきようになんですけれども、赤信号のところが行政の役割だというふうに明確に書いている、そんなことは決してないんです。決してないんですが、全部に目が行き届くだろうかというと、やはり行政の中でどうしてもできない部分というのはあるよねというところを、一緒にできませんかというような話ですよ

ね。一緒に連携をやらないと、いきなり青から黄色になって、いきなり黄色から赤になるというふうな話ではなくて、もっと緩やかなというか、話だと思うんです。だから、どこからどこまでが区切りがあってという話では決してない中で、どうやったら赤にならない、黄色にならないような形にしていくかと。

ちょっとこの図のイメージでは、みんなこんな青の子なんか誰もいないんじゃないかというふうなお話もありましたけども、しかし概念としてはこういうイメージで、みんなで底上げを図っていくために、それぞれの活動がより連携しながらやっていく必要があるかなというふうに思わせていただきました。

池田さんの冒頭御紹介いただいたように、かなり先駆的に外国の方との取り組みをやっていただいているという話でしたけども、さっき言ったように、２年前は６０人ぐらいの生徒さん、外国の生徒さんが、幸区は今百何十人になっている、１５０倍になっている、１．５倍になっているというふうな話です。

これは、これからますます外国の方が増えるだろうなというふうに予測していますけれども、本当にこの前も職員とも話していたんですけれども、日本語が分からない子どもさん。よく日本語が分からない親、子どもは日本語が分かるというふうな方もいらっしゃるんですけど、日本語が分からない子どもたちが、学校にも行き場所がないといって街にたむろするみたいな話という中になってくると、どこの行政サービスにもひっかからないというふうなことはちょっと大変だよねと、そうなったら大変だというふうな話で、今、内部で議論をしているんですけれども、そういった意味でも、新しい課題だとかたくさん出てくるときに、むしろ今までどういう、行政もやったことがなかったんだけれども、池田さんのところのような方がノウハウがあるから力を貸してくださいとか、いろんなことをどういうふうにやればいいですか、教えてください、あるいは、地域の中でどういうふうに受け入れていくかというようなことも、課題としてこれからどんどん出てくると思うんです。

ですから、繰り返しになりますけど、ここからは行政とかという話じゃなくて、いかに区役所と地域の活動している皆さんとが情報共有をして、そして、横展開していくというか、あそこの人はこんなことをやっている、あの人もこんなことをやっているから、ここで一緒にできませんかということで、なるべく気付くというか、広げていくということをやっていかなければならないなと思います。

是非、それぞれの活動している団体の皆さんには、本当にまちづくりに協力していただいていることに感謝したいと思いますし、これからも是非、こういう団体がもっともっとたくさん出てくるように、皆さんの力を貸していただければというふうに思っています。

今日いただいた御意見、議論などを、市政の中でまた活かしていきたいと思っております。

今日は御参加いただいて、今日発言できなかったという方もいらっしゃると思いますが、本当に申し訳ありませんでした。御協力に感謝申し上げまして、御挨拶とさせていただきたいと思います。

どうも本当に御協力ありがとうございました。

（拍手）

司会：以上をもちまして、第３９回区民車座集会を終了いたします。

本日は御来場いただきまして、誠にありがとうございました。

お帰りの際はお忘れ物がございませんよう、御注意ください。また、受付の際に配付させていただきましたアンケート及び意見シートへの記入について、御協力をお願いいたします。

なお、アンケート及び意見シートは、お帰りの際に出口にいる職員にお渡しください。

この後、本日参加いただいた団体の皆様同士で、横の連携を図る交流を深めていただく場を設けさせていただいております。

本日はこれをもちまして、閉会とさせていただきます。本当にありがとうございました。